



震災10年取り組み紹介

弘大リレーシンポジウム開始

東日本大震災から10年をのりまでの取り組みを振り返るのを前に、弘前大学 断片的に振り返ること震災について考える

リレーシンポジウムの初回が26日、弘前市の土手町コミュニティパークで開かれた。5月まで全7回にわたりに行われる。

弘前大学の取り組みを通じ、東日本大震災を振り返ったシンポジウム

シンポジウムは、同大学の学部・研究科・研究所がそれぞれ震災関係の研究活動などで培ってきた「知」を地域社会に向け発信することを目的に開催。対象は市民や自治体の防災担当事者の

ほか、同大への進学を考えている高校生など。講演の機軸はFMアップルウェーブの動画サイト「アップルストリーム」でオンライン配信された。

初回は「地震の科学・社会基盤施設の被害と対応」をテーマに、理工学研究科准教授の前田拓人氏と土原子晶久氏、農学生命科学部教授の森洋氏が講演した。

このうち、前田氏は震災をきっかけとした東北地方太平洋沖地震について、データを例示しながら「日本列島の形を変えてしまうほど大きなものだった」と紹介。

震災を契機に、小さな津波でも高精度で感知できる海底圧力計が整備されるなど、海底観測網が劇的に強化されたことに触れ「日本周辺に桁違いの観測網が敷かれている。防災の面では陸に津波が到達する前に感知できる側面もある」と強調した。

次回は2月18日、「医療対応」をテーマに開催する。

（田中康貴）

※この画像は当該ページに限って陸奥新報社の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。